様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2021
課題番号：１６Ｋ０２１８９

研究課題名（和文）戦前期における大本教と道院・紅卍字会と朝鮮新宗教団体との連合運動に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Religious Alliance Movement between Oomoto, the Daoyuan-Red Swastika Society, and the Korean New Religious Organization Before World War II

研究代表者
佐々　充昭（Sassa, Mitsuaki）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：５０４１１１３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦前期の東アジアにおいて、日本の大本教と中国の道院・紅卍字会と朝鮮の新宗教団体との間で推進された宗教連合運動の実態について解明した。大本教と道院・紅卍字会の提携における林出賢次郎の役割、内田良平と出口王仁三郎による皇道宣揚運動、満洲国独立における大本教の関与、1934年人類愛善会朝鮮支部の設立、1935年京城に設立された朝鮮道院、大本教と朝鮮の檀君系教団との関係など、従来の研究で論じられてこなかった新たな事実を発見し、学会報告や論文などを通じて公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、大本教が戦前期に道院・紅卍字会と推進した宗教連合運動を「大アジア主義」の宗教的次元における実践と捉え、東アジアの新宗教団体のみによる宗教連合運動は、アジア地域のブロック化に同調する危険性があることを問題提起した。戦前期の東アジアにおいて実際に行われた宗教連合運動の問題点を批判的な観点から検証する本研究は、現代東アジアにおける「宗教間対話」や「宗教協力」の在り方を考える上で大きな意義を持つと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the actual state of the religious alliance movement in pre-war East Asia, which was promoted by Oomoto of Japan, the Daoyuan-Red Swastika Society of China, and the new religious organization of Korea. The researcher found new facts that had not been discussed in previous research, published them in academic journals, and presented them at an academic conference.
These include: the role of Kenjiro Hayashide in the partnership between Oomoto and the Daoyuan-Red Swastika Society; the Imperial Way (Kodo) proclamation movement promoted by Ryohei Uchida and Onisaburo Deguchi; the involvement of Oomoto in the independence of Manchuria; the establishment of the Korean Branch of the Universal Love and Brotherhood Association (Jinruiaizenkai) in 1934; the establishment of Chosun Daoyuan in Seoul in 1935; and the relationship between Oomoto and the Korean Dangun religious movement.

研究分野：東アジア宗教思想史

キーワード：大本教　道院・紅卍字会　出口王仁三郎　内田良平　人類愛善会　朝鮮新宗教　檀君系教団　宗教連合運動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究を着想するに至った経緯

研究代表者は韓国ソウル大学校宗教問題研究所に所属し、韓国民族宗教協議会が主管する「日帝の韓国民族宗教弾圧政策研究」プロジェクト（1995～97 年）に参加した。その際、韓国の普天教本部を訪問し、大本教との提携関係について信徒から聞き取り調査を行った。その後、植民地期朝鮮においても道院・紅卍字会が設立された事実を知り、朝鮮学会第 54 回大会（2003 年 10 月）において「植民地下朝鮮における道院・紅卍字会の設立」という研究報告を行った。また、戦前期における道院・紅卍字会関連資料を多数発見し、大本教と道院・紅卍字会との提携が満洲国の独立と密接に関連している事実を見出した。その研究成果の一部を、北京大学国際東亜研究センターと韓国新宗教学会が共同主催した『世界新宗教国際学術大会』(2006 年）において「戦前期の大本教と道院･世界紅卍字会との連合運動に関する研究」として報告した。本研究は、このような研究成果を土台として着想されたものである。

(2) 先行研究の動向と本研究の位置づけ

大本教と道院・紅卍字会との提携関係については、『大本七十年史』(1971 年）に掲載された記事をもとに研究が進められてきた。近年の成果としては、「複眼的視点からの大本教研究」(科研（C）研究代表者：対馬路人、2015～7 年）がある。道院・紅卍字会に関しては、宮田義矢が一連の研究成果を発表している他、大本教との提携に関しては、孫江が関連論文を多数発表している。近年では、武内房司が『越境する近代東アジアの民衆宗教』(2011 年)、『戦争・災害と近代東アジアの民衆宗教』(2014 年）を刊行し、その中で宮田や孫の研究が公開されている。しかし、これらの研究は大本教と道院・紅卍字会の二教団に着目したものであり、朝鮮の新宗教を射程に入れたものではない。

これに対して、本研究では、大本教と道院・紅卍字会との提携運動に植民地期朝鮮の多くの新宗教教団が包摂されていった事実に着目する。この宗教連合運動には、従来からよく知られている普天教だけではなく、侍天教・上帝教などの東学系教団や檀君教・大倧教などの檀君系教団も合流していった。本研究では、互いに性質の異なる東アジア三国の宗教団体が、どのような理由で提携・連合を推進していったのか歴史学的な視点から明らかにする。

２．研究の目的

大本教と道院・紅卍字会との提携について、従来の研究では主に次のような理由が考えられてきた。すなわち、両教団とも宇宙を主宰する至高神を信仰対象とし、神懸かりによる「お筆先」あるいは「扶乩」という自動書記術を用いた神示をもとに、「諸宗教の一致」という教義を掲げていた点である。大本教では、根本の独一真神（主神）を信奉し、「万教同根」思想を掲げた。道院・紅卍字会でも「至聖先天老祖」を信奉して「五教同一」を唱道した。このような教義の共通性が両教団の深い提携を生み出したとされてきた。

これに対して本研究では、日本軍部による中国大陸への軍事侵攻という時代状況の中で、教団組織の維持・拡大を図ろうとした両教団の政治的な戦略のもとに、このような提携・連合運動が行われたと考える。当時の日本では、満蒙を中国から分離させて日本が支配するという所謂「満蒙領有計画」が、一部の軍人や大陸浪人の間で画策されていた。このような国際情勢の中で、教勢をアジア全域に拡張しようと試みたのが大本教であった。大本教は海外の諸宗教団体と提携関係を結んでいったが、その中で道院・紅卍字会との提携は、中国大陸へ進出するための足がかりとなった。特に満洲事変を前後する時期に、大本教は道院・紅卍字会との提携関係を一層深化させ、両教団は「合同」ともいえる関係となった。このようにして構築された布教基盤をもとに、大本教は満洲事変以後、満洲国への宗教進出を本格化させた。

さらに、満洲国の承認をめぐって日本が 1933 年に国際連盟から脱退し、それに代わる国際機関として「アジア連盟」の結成が求められると、「内鮮一体」「鮮満一如」のスローガンが叫ばれ、各種アジア主義団体が多数結成された。このような時代状況の中で、大本教は人類愛善会朝鮮支部を設立して朝鮮への宗教進出を本格化させた。その目的は、帝国日本の支配圏に入った「日本－朝鮮－満洲国」間の連結をより強固なものにし、「アジア連盟」を結成するために、大本教と道院・紅卍字会との宗教連合運動を朝鮮の諸宗教団体へ拡張するためであったと考えられる。

以上のような観点から、本研究では、戦前期に日本の大本教と中国の道院・紅卍字会と朝鮮の新宗教団体との間で推進された宗教連合運動の実態について解明する。戦前期大本教の宗教連合運動の特質を「近代東アジア」という視点から批判的に検証することにより、東アジアで展開される宗教連合運動の在り方について新たな問題提起を行うのが、本研究の目的である。

３．研究の方法

(1) 現地調査

本研究は、資料調査と現地調査を並行して行う。現地調査に関しては、研究期間中に COVID-19 事態が発生したために、当初計画していた中国と台湾での調査が行えなくなり、韓国でのみ調査を行った。韓国での現地調査では、1935 年に京城（ソウル）に設立された朝鮮道院に関し

て、道院の建物があった跡地（現在の玉仁洞）を調査した。また、朝鮮道院幹部の後孫が保有していた資料が韓国独立記念館（天安市）に所蔵されていることを確認し、同館内の韓国独立運動史研究所において研究員から聞き取り調査を行った。朝鮮道院には、檀君系教団の信徒たちが多数入会していた。韓国内の大倧教系研究機関と連繋して、朝鮮道院に入会した檀君教系教団の信徒に関する調査を行った。

（2）文献調査

大本教と道院・紅卍字会との提携に関しては、『人類愛善新聞』『神の国』『真如の光』（「道慈課」通信欄と「神機の動き」欄）から関連記事を抜粋する作業を行った。内田良平との連携に関しては、『昭和青年』『昭和』『神聖』などの機関誌の他、『内田良平関係文書』『黒龍会関係資料集』などの資料集を精査した。道院・紅卍字会に関しては、『東瀛布道団日記』と『朝鮮主院開幕壇訓』を新たに発見し、その内容を翻訳・分析した。その他、国立国会図書館や国立公文書館アジア歴史資料センターのデータベースを利用して関連資料を収集した。朝鮮の新宗教教団に関しては、韓国の国立国会図書館や国立中央図書館などを利用して、普天教・侍天教・檀君教・大倧教、および朝鮮道院の関連資料を収集した。

（3）本研究の分析視点

本研究では、現地調査と文献調査を通じて収集した資料を、以下の二つの分析基軸を設けて時系列に整理し、この宗教連合運動の発展過程を歴史的な視点から跡づけた。

1）出口王仁三郎と内田良平との連携：「アジア主義」の観点から

大本教と道院・紅卍字会による宗教連合運動は、大本教の教祖・出口王仁三郎によって主導されたが、この運動には強力な協力者があらわれた。日本の代表的右翼として活動した内田良平である。内田は 1925 年 1 月頃に綾部の大本教本部を訪問し、王仁三郎に直接面会して意気投合した。また、内田は師である頭山満を王仁三郎と引き合わせ、これ以降、内田と頭山は玄洋社・黒龍会を通じて大本教と海外諸宗教団体との提携運動を支援した。1934 年 7 月に昭和神聖会が結成され、統管は王仁三郎がつとめ、副統管に内田が就任した。これにより、王仁三郎と内田の関係はよりいっそう深まっていった。

内田と王仁三郎の両者を結びつけたのは「皇道」思想であった。「皇道」は幕末維新期に唱えられた用語であるが、昭和期に入って陸軍内部で皇道派が台頭すると、ファシズム下における日本軍の軍事侵攻を正当化するイデオロギーとして機能した。内田は黒龍会の活動を通じて「皇道」を訴え、大本教でも 1916（大正 5）年と 1933（昭和 8）年に教団名称が「皇道大本」と改称されたように、王仁三郎の指導下で「皇道」が強調された。「皇道」に関して、本研究では「アジア主義」の観点から考察を試みる。アジア主義は、①純粋の「アジア連帯主義」と、②アジア侵略のイデオロギーとしての「大アジア主義」に分類されるが、内田も王仁三郎も「大アジア主義」の立場から「皇道」を唱道した。内田は、王仁三郎が推進した道院・紅卍字会との提携を全面的に支援したが、それも「皇道」によるアジア宗教の統一を目的とするものであった。

以上のような観点から、本研究では、大本教の宗教連合運動を「大アジア主義」による「皇道」宣揚運動として捉え、特に内田が王仁三郎との連携を通じて道院・紅卍字会や朝鮮の新宗教教団に対してどのような関与を行ったのか明らかにする。

2）「大本教・人類愛善会」と「道院・紅卍字会」の二元的協働関係

本研究では、大本教の外郭団体である人類愛善会の活動について着目する。人類愛善会は 1925 年 6 月に設立されたが、その前身は神戸道院の中尾晃久が 1925 年 2 月に発足させた万国信教愛善会であった。このように人類愛善会の創設は、「道院＝宗教教団」と「紅卍字会＝慈善団体」を並立させて布教活動を実践する、道院・紅卍字会の二元的協業体制をモデルにしたものであった。人類愛善会には大本教の信者に限らず、いかなる宗教を信仰する者も同会の会員となることができた。このような宣教システムの構築は、海外諸宗教団体との提携運動を一気に促進させる重要な契機となった。実際、大本教と道院・紅卍字会との連合運動は、「大本教－人類愛善会」と「道院－紅卍字会」という二元的協業体制をもつ組織同士の連合体として推進されていった。

また、人類愛善会の活動は植民地朝鮮において大きな意味をもつものであった。従来の研究では、1920 年代における大本教と道院・紅卍字会と普天教との三者提携が注目されてきた。しかし、実際のところ、朝鮮の新宗教教団が大挙して大本教と道院・紅卍字会の宗教連合運動に合流していったのは、1934 年 12 月に人類愛善会朝鮮支部が設立された時であった。そしてこの時、内田良平が大きな役割を果たした。内田は韓国併合前に一進会という親日団体を使って「日韓合邦」運動を展開し、朝鮮の宗教事情に精通していた。大本教の朝鮮進出は、内田良平が一進会を通じて築いてきた人脈と活動基盤を引き継ぐ形で行われた。

以上のような観点から、本研究では、朝鮮の新宗教教団が大本教と道院・紅卍字会の宗教連合運動にどのようにして包摂されていったのか、人類愛善会朝鮮支部の設立をめぐる内田良平の関与という観点から明らかにする。

４．研究成果

（1）大本教と道院・紅卍字会の提携理由：林出賢次郎が果たした役割

大本教と道院・紅卍字会との提携は、1923 年 9 月に発生した関東大震災の際に端を発する。これに関して、本研究では両教団の提携を仲介した人物として林出賢次郎（1882～1970）に着目し、林出が両教団の提携に際してどのような役割を果たしたのか明らかにし、その成果を論文として公刊した。その内容をまとめると、以下の通りである。

中国語に堪能であった林出は外務省の外交官として 30 年余り中国で生活をした。1923 年の関東大震災時、南京日本大使館の書記官であった林出は、紅卍字会南京分会による救援活動を支援した。この時、林出は道院・紅卍字会に入会した。現在、外務省外交史料館には林出が日本の外務省に送った報告書が残されている。それによると、紅卍字会側の使節員である侯延爽が日本を訪問する以前の段階で、林出は外務省関係者・宗教学者・宗教人への紹介や、道院・紅卍字会の交流先として大本教への周旋を行っていたことが確認できる。

また、1932 年に満洲国が建国されると、林出は「宮内府行走」に聘せられ、溥儀の通訳をとつめた。その傍らで北京総院の名誉統掌、紅卍字会中華総会の名誉会長、満洲国総会の首席維護会長などの要職に任ぜられ、道院・紅卍字会の最高幹部の一人となった。このように林出は、中国駐在外交官としての地位を利用して、大本教と道院・紅卍字会を結びつける架橋者の役割を果たし続けた重要な人物であることを明らかにした。

（2）道院・紅卍字会からの 3 回にわたる布教団の派遣

1929 年から 1930 年にかけて道院・紅卍字会側から 3 回にわたる布道団（「東瀛布道団」）が日本へ派遣された。これを機に、500 ヶ所以上の道院が大本教の支部内に設置され、道院と大本教は「合同」といえるような関係を持つに至った。本研究では『東瀛布道団日記』という資料を新たに発見し、この時期に両教団の緊密な連携が進められた理由について考察し、その成果を論文として公刊した。その内容をまとめると、以下の通りである。

道院・紅卍字会には中国各界の有力人士が多数加入し、上層階級の権益保全集団としての性格を有していた。また、蔣介石の率いる国民政府は道院を迷信団体として弾圧し、紅卍字会の慈善活動のみを承認した。その一方で、東北地方における道院・紅卍字会は急速な勢いで拡大した。その渦中で、1928 年 6 月に張作霖が奉天近郊で爆殺される事件が発生した。日本軍部による東北侵攻の動きをいち早く察知した王仁三郎は、道院・紅卍字会の組織基盤を利用して中国東北地方への進出を画策した。また道院・紅卍字会に所属する上層階級の人士たちは、自分たちの所有する種々の権益を保護するために、日本側勢力との提携を選択した。

こうして 1929 年から 1930 年に三回にわたる大規模な布道団が、中国東北部の道院・紅卍字会から派遣された。これにより、東北主院（瀋陽道院）と大本教の亀岡本部が直接連絡を取り合って連携を図る構図が、大本側の意向によって確立された。

（3）満洲国独立運動における大本教の関与

大本教は道院・紅卍字会との提携関係を利用して満洲国独立工作を後方から支援した。その事実を明らかにし、論文として公刊した。その内容をまとめると、以下の通りである。

1931 年 9 月満洲事変の勃発後、関東軍は東北各地の有力者に独立政権を作らせ、これら諸政権の自発的連合をもって、南京の国民政府から分離した独立国家を建設するという構想を立てた。関東軍が工作対象とした地方有力者の多くは道院・紅卍字会の会員であった。満洲事変が勃発すると、王仁三郎の指示により出口日出麿（第 3 代教主出口直日の夫、王仁三郎の婿）が満洲へ緊急派遣された。日出麿は人類愛善会と道院・紅卍字会との提携関係を利用して、難民救済と戦禍の収集事業を展開した。その傍らで、満鉄の支援を受けながら日本軍の慰問活動を行い、道院・紅卍字会の主要メンバーを関東軍や満鉄関係者に結びつけた。

地方有力者たちの中で、袁金鎧、臧式毅、闞朝璽、湯玉麟、熙洽、張景恵らが道院・紅卍字会の幹部として大本教の人類愛善会に入会した。また、満洲事変中に奉天市の市長をつとめて満洲国建国の産婆役を果たした趙欣伯が、大本教と深い関係にあった事実を明らかにし、大本教の満洲国独立工作への関与の一端を明らかにした。

（4）内田良平と道院・紅卍字会への関与

内田良平が道院・紅卍字会とどのように関与したのか考察し、その研究成果を論文として公刊した。その内容をまとめると、次の通りである。

1924 年に神戸道院が開設された後、王仁三郎は 1925 年に中国の北京において世界宗教連合会を発足させた。これは道院・紅卍字会と姉妹関係にあった中国の悟善社（救世新教）という宗教結社が主催したものであった。この連合会には岡﨑鉄首という大陸浪人が積極的に協力した。岡﨑は 1924 年王仁三郎のモンゴル入り（入蒙）の際に、盧占魁と王仁三郎を結びつけ、入蒙の具体的計画を立てた人物であった。また、岡﨑は頭山満や内田良平らと昵懇の仲であった。その他にも、内田と頭山の代理として岡貞吉らが中国の北京へ渡っている。これらの事実から、北京で開催されたこの宗教連合会は、玄洋社・黒龍会が大本教と道院・紅卍字会との提携を利用しよ

うとした最初の動きであったと理解することができる。
　また、三次にわたる東瀛布道団の来日を通じて、内田と道院・紅卍字会との関係はより深まった。1929 年に第一次布道団が来日した際、内田は紅卍字会日本主会の責任会長に就任し、頭山満が顧問に就任した。1931 年の満州事変勃発後は、黒龍会創設当初からの目標であった「日本によるアジア統合＝大アジア主義」を実現するために、大本教と道院・紅卍字会の提携関係を利用して満洲国独立運動を背後から支援する工作を展開した。

（5）人類愛善会朝鮮支部の設立
　1934 年 12 月に設立された人類愛善会朝鮮本部の創設経緯を詳細に明らかにし、その成果を論文として公刊した。その内容をまとめると、以下の通りである。
　1905 年に乙巳保護条約が締結されると、内田良平は初代統監・伊藤博文の招聘により統監府嘱託となった。その傍らで、親日団体である一進会の顧問として「日韓合邦」運動を推進した。1910 年の韓国併合によって一進会は解散させられたが、一進会の宗教母体であった侍天教は存続した。1919 年に三･一運動が勃発し独立気運が高まると、内田は元一進会会員を利用して 1921 年に同光会を組織した。同光会は 1922 年日本の帝国議会に「朝鮮内政独立請願書」を提出したが、これは朝鮮人の真の独立要求を妨害するものであった。同光会の「独立請願書」は檀君教の教主である鄭薫模が代表者となって 40 余名の署名をまとめて提出している点が注目される。
　大本教は 1934 年 12 月に人類愛善会朝鮮本部を設立した。同会には朝鮮諸宗教の信者 5720 人が参集し、その内の約半数が上帝教と侍天教の信者であった。上帝教が侍天教から分派した教団であったことを考えると、内田が作り上げてきた元一進会の人脈が大本教側に提供されたことがわかる。実際、元一進会会員にして侍天教徒の李海天や、同光会朝鮮支部の幹事長であった李喜侃が、人類愛善会員の獲得工作に奔走した。彼らはいずれも内田の腹心であり、内田の指示に従ったものであった。

（6）朝鮮道院の設立
　1935 年に朝鮮の京城に設立された朝鮮道院の創設経緯や組織的特性を明らかにし、第 72 回朝鮮学会学術大会で報告した。その内容をまとめると、以下の通りである。
　朝鮮道院は、尹徳栄（1873～1940、道名：徳化）が中心となって設立された。尹徳栄は、純宗妃の父である海豊府院君尹沢栄の兄であり、朝鮮時代末期から李王室の外戚長として宮中で絶大なる権威を誇った。韓国併合後は子爵の爵位を授与された第一級の親日貴族であった。
尹徳栄は巨費を投じて松石園一帯の土地を買収し、碧樹山荘と呼ばれる建物郡を建設した。そのうち最も豪華な石煉瓦造の高樓建築（地上 3 階・地下 1 階建）を朝鮮道院の建物として提供した。朝鮮道院は、満洲国内の道院（特に安東道院）と大本教の人類愛善会朝鮮支部の強い関与のもとに設立された。朝鮮道院の最高職である「道慈統監」には、道院・紅卍字会の元老幹部である李智真と王性真と共に、林出賢次郎が就任している。
　朝鮮道院には、尹徳栄一族と関係の深い親日派の儒学者たちが多数入信した。1910 年韓国併合時に尹徳栄と協力した閔丙奭（子爵、道名：妙化）も、責任統掌として朝鮮道院に入会した。尹徳栄は 1938 年経学院大提学と明倫学院総裁に任命され、1939 年に朝鮮儒道聯合会の会長に就任し、朝鮮儒教界の頂点に君臨した。これらの団体は、「皇道精神」に基づく親日儒教を朝鮮人儒学者に注入するためのものであった。このような事実から、朝鮮道院も朝鮮総督府の皇民化政策に朝鮮人儒学者たちを迎合・包摂させる役割を果たしたと見なすことができる。

（7）大本教、朝鮮道院と檀君系教団との関係
　本研究を通じて、朝鮮の檀君系教団に関する研究を行い、その研究成果を単行本や論文として公刊した。特に 1935 年に設立された朝鮮道院に檀君系教団の信徒が多数入信した事実を明らかにし、第 72 回朝鮮学会学術大会で報告を行った。その内容をまとめると、以下の通りである。
　朝鮮道院の創設者である尹徳栄は、1920 年代に大倧教に入信して経済的な援助を行った。また閔丙奭は 1930 年に檀聖殿（檀君神殿）奉賛会の顧問を務めるなど、檀君教を支援した。彼らの勧誘によって、大倧教や檀君教の信徒が朝鮮道院に多数入会していった。その背景には、1934 年に人類愛善会朝鮮本部が設立された際、侍天教と上帝教に次いで檀君教が積極的に関与したことがあげられる。その理由は、李海天が檀君教の信徒であったことによる。李海天は侍天教の信徒であると同時に、檀君教の大宣師をつとめた檀君教の幹部でもあった。
　一方、大本教も檀君系教団に大きな関心を持った。当時は日鮮同祖論の観点から「檀君＝素戔嗚尊」説が唱道されていた。大本教では、素戔嗚尊はアジア大陸を支配していたと主張し、記紀神話に出てくる「曾尸茂梨」を春川の牛頭山に比定した。1934 年には人類愛善会春川支部の信徒が牛頭山に素盞嗚尊を祀る神祠を建設する計画をたて、同年朝鮮巡教に赴いた出口日出麿は春川の鳳儀山を檀君神社の場所として指示した。1935 年 1 月には京城郊外始興にある檀君教本部へ約 30 名の大本教信徒が訪問・参拝した。大本教と朝鮮の檀君系教団との関連について論じた研究はこれまでに無く、このような事実を明らかにしたことは、本研究の大きな成果である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 佐々充昭	４．巻 第137号
２．論文標題 「旧韓末 日本における孫秉熙と羅喆の出会い：『要視察外国人挙動関係雑纂』記録を中心に」（韓国語）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『震檀学報』	６．最初と最後の頁 223－253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 佐々充昭	４．巻 第676号
２．論文標題 「林出賢次郎の生涯－大本教と道院・紅卍字会との提携を仲介した外交官」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『立命館文学』	６．最初と最後の頁 45－61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐々充昭	４．巻 第675号
２．論文標題 「大本教の皇道宣揚運動と人類愛善会朝鮮本部の設立－出口王仁三郎と内田良平との提携を中心に」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『立命館文学』	６．最初と最後の頁 13－53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐々充昭	４．巻 第673号
２．論文標題 「満洲事変における大本教の宣教活動－道院・紅卍字会との提携を中心に」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『立命館文学』	６．最初と最後の頁 75-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐々充昭	4．巻 第667号
2．論文標題 「大本教と道院・紅卍字会との提携－宗教連合運動に内包された政治的含意」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『立命館文学』	6．最初と最後の頁 51－64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々充昭	4．巻 660
2．論文標題 植民地朝鮮に生きた文人画家・池雲英の夢体験－『白蓮志異』を中心に－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 立命館文学	6．最初と最後の頁 185－203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々充昭	4．巻 第657号
2．論文標題 旧韓末における羅喆の訪日活動－朝鮮開化派亡命政客および玄洋社系人士との交流を中心に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 立命館文学	6．最初と最後の頁 20～79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々充昭	4．巻 第242輯
2．論文標題 青山里戦闘において大イ宗教が果たした役割－ロシア革命派からの武器入手を中心に－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 朝鮮学報	6．最初と最後の頁 1～36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々充昭	4．巻 第111号
2．論文標題 東北アジアの歴史記憶とツーリズム－中国内における金佐鎮将軍記念事業会の活動をめぐって－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6．最初と最後の頁 87～122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々充昭	4．巻 第45号
2．論文標題 北路軍政署の創設と大イ宗教－総裁・徐一の活動を中心に－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 立命館国際地域研究	6．最初と最後の頁 135～151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々充昭	4．巻 第40輯
2．論文標題 趙素昂の大同思想とアナーキズム－『六聖教』の構想と『韓薩任』の結成を中心に（韓国語）	5．発行年 2016年
3．雑誌名 韓国宗教	6．最初と最後の頁 221～246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 佐々充昭
2．発表標題 「旧韓末日本における羅喆と孫秉熙の出会い：植民地近代と韓国民族宗教の創設」（韓国語での報告）
3．学会等名 震檀学会 2021年度 秋季学術大会（植民地近代と韓国人の宗教活動）（招待講演）
4．発表年 2021年

１．発表者名 佐々充昭
２．発表標題 「植民地朝鮮における道院・紅卍字会の設立－大本教と檀君教との関連を中心に」
３．学会等名 第72回朝鮮学会大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

１．著者名 佐々充昭	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 584
３．書名 『朝鮮近代における大イ宗教の創出：檀君教の再興と羅喆の生涯』	

１．著者名 青野正明、青山亨、一色哲、串田久治、佐々充昭、シン東風、辻高弘、深見純生、細井浩志	４．発行年 2020年
２．出版社 東方書店	５．総ページ数 280
３．書名 『天変地異はどう語られてきたか－中国・日本・朝鮮・東南アジア』（第2部「朝鮮における天変地異と予言－讖緯書『鄭鑑録』に描かれたユートピア」を執筆担当）	

１．著者名 朴光洙、高炳徹、北島義信、佐々充昭、辛炫承、廉勝竣、柳江夏、李賛洙、金俊	４．発行年 2018年
２．出版社 韓国学中央研究院出版部	５．総ページ数 444
３．書名 東アジアの大同思想と平和共同体（原文は韓国語）	

１．著者名 ソウル大学校宗教問題研究所	４．発行年 2018年
２．出版社 ソウル大学校出版文化院	５．総ページ数 584
３．書名 韓国社会と宗教学（原文は韓国語）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関